（翻刻）冷泉家時雨亭文庫本小野宮殿集

小倉嘉夫

（凡例）

一、本解題は冷泉家時雨亭文庫所蔵「小野宮殿集」を活字に翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、可能な限り底本に忠実であるように努め、句読点を付さず、清濁も表示せず、かつ改行などもそのままにし、改丁は（一オ）の形で表示した。

一、歌頭に本集の歌番号を記し、（　）の中に『私家集大成』第一巻所収「清慎公集」の歌番号を付記した。

一、本集の書誌や性格については、冷泉家時雨亭叢書『平安私家集六』の解題（片桐洋一先生執筆）、および本誌本号所載の片桐洋一先生「冷泉家時雨亭文庫本『小野宮殿集』の構成と成立」を参照されたい。

一、翻刻をお許しくださった冷泉家時雨亭文庫に心から御礼申し上げる次第である。

小野宮殿集　（表紙）」

小野宮殿　（見返し）」

女御にきこえはしめ給とて

一（4）　をとき、にものなれにける衣手は
なみたと、もにふりやしにけむ

又

二（5）拾ひとしれぬおもひはとしもへにけれと
我のみしるはかひなかりけり

返し

三（6）　心よりたれかはしらむかす〳〵に
つ、むおもひのはやもきえなは　（一オ）」

又

四（7）勅たれにかはあまた思ひもつけそめし
きみよりまたはしらすそありける
返し
五（8）あたひとのうける思ひはさためなき
うちつけにこそつかはつくらめ
おとこ
六（9）撰あた人もなきにはあらすありといへと
わか身にはまたき、そならはぬ
返し　（一ウ）」
七（10）きみならてまたこそきかねあたなるは
みなこのほとの名にやあるらむ
おとこたゝかく
八（11）いとふをもしらぬ我こそあはれなれ
いとゝうときに猶もそふかな
おとこやいかにきこえ給へり
けむ女
九（12）いひさしてたえこそしなめ水くきの
なかるゝそこの心しらねは　（二オ）」
をとこ
一〇（13）いひそめし水の心しきよけれは
ちとせをふともにこりしもせし
返し
一一（14）雨ふれはにこらぬ水もきこえねと
まつ山の井そうたかはれける
又をとこ
一二（15）山の井に水にはふかさまさりつゝ
たゆる時なき物とこそきけ
女　（二ウ）」
一三（16）をとにきく心あさかの山の井は
おりたゝねともそこそしらるゝ
をとこ
一四（17）みちのくにありといふなる山の井は
とをき所にまつたのまるゝ
返し
一五（18）ほとゝをみたゝのみわたるうきしまの
うきたるほとにたのむなる哉
おとこ
一六（19）今よりそうれしかるへきたのむへき
こゝろにはやくならはなしてむ（三オ）」
返し

一七（20）人はいさたのみやすらむ我はた、
うれしかるへきこともしらぬに
あるやうありておとこ
一八（21）たそかれに人とかむとも秋風に
しらふることのこゑとこたへむ
返し
一九（22）きみたにもとふにこたふる物ならは
たそかれ時をなにかをつへき
女御やいかにきこえ給へりけむ（四ウ）」
二〇（27）かたみにもつまむ人あらはかすかの、
わかなのたねは又も、えなむ
をとこた、かく
二一（28）風ふかてなきたるうらの我なれや
とあれは女
二二（29）かせふかてなきたるあさときくからに
よそなるそてもしほのみそみつ
おとこの御はらからに又かの女御
の御はらからすみ給とき、て
二三（30）しほのみつそてはしらなみわたつみの（五オ）」
うらやましくもき、わたるかな
返し
二四（31）白浪のまたこそしらねたかさこの
うら山しくもなにかきこゆる
おとこ
二五（32）ゆふされはいつしかとのみたかさこの
松といふ事をきくにやあるらむ
返し
二六（33）たれをかは松たかさこのしか許
うらやかへちはこゑのきこゆる（五ウ）」
をとこ
二七（34）ぬひきする人しなけれはから衣
きみかたもとをたのみこそすれ
返し
二八（35）よそならぬ人こそきせめから衣
たもとのしたにき、もならさし
おとこ
二九（36）君たにもぬきておほは、唐衣
よそのそてともなにかおもはむ
又をとこ（六オ）」
三〇（37）うつるいろにならふと人をきくの花

うしろやすくはあらすもあるかな

返し

三一（38）菊の花うつろふことやうつるとて
ならふにしもそいろまさりける

又おとこ

三二（39）花も葉もうつれるきくを見る人や
あたなる事は見もならふらむ

返し

三三（40）うつろふをよそにそきくといふ人も　（六ウ）」
花におとらぬ心地こそすれ

をとこなかきたの方に

三四（41）わかことはおもはぬきみを世中の
心ほそきに猶たのむかな

返し

三五（42）君たにも心ほそしとおもひなは
われさへたのむ人やなからむ

内にのみものし給へはおとこ

三六（43）撰けふは、やみ山をいて、郭公
けちかきこゑをわれにきかせよ　（七オ）」

返し

三七（44）人はいさみ山かくれのほと、きす
ならはぬさとはすみうかるへし

をとこ

三八（45）郭公み山をいてぬ物ならは
我もさとにはなにかすむへき

又返し

三九（46）ひとしれぬおもひしなくは郭公
なにかみ山をいてかてにせむ

女におなしをとこ　（七ウ）」

四〇（47）あはれとも思ふやきみは年をへて
つらきをしひてたのむ我をは

又

四一（48）玉すたれかけてへたつる心なく
けちかき色をきみは見せ南

又女御

四二（49）をとにきく年へにけれはきくの花
心あてにもおりつへきかな

返し

四三（50）むらさきにさくともなとかきくの花　（八オ）」
心こはくはならむとそ思

をとこ

四四（51）菊の花おりてこそ見めよそにのみ
心をやらむ事のかひなさ

返し　女御

四五（52）にほふとはよそにてをきけ菊の花
心たかさはおられしもせし

又返し

四六（53）とをくてもにほはむ事もしられしを
心たかさもおりてこそ見め　（八ウ）」

女御の御もとにおはしたるに

かへり給ひねときこえ給へは

四七（75）月はいて、いるとこそ見れをくら山
ふもとにきてはかへる物かは

女御

四八（54）あはれとも人の見るへくもろともに
ありあけにのみ世をへてし哉

四九（56）秋風はいたくふくともをみなへし
おもふ方にもまつなひかなむ　（九オ）」

女やいか、きこえたまひけむ

五〇（57）花たにも色かはらすはこむらさき
ふかき心はいつかうつらむ

女御

五一（58）たちよりてまつ我おらむをみなへし
あらき風にもあてしと思を

五二（59）我ならてたれかはおらむをみなへし
こ、ろをひにてぬしはなくとも

女御　（九ウ）」

ふたはよりことにてをひしたねなれは

なときこえ給つれは

五三（60）をみなへしなてしむかしをきくからに
おらぬにそてはまつそつゆけき

いか、きこえたまへりけむ

五四（61）風たにもふきみたるなる花なれは
ひきよせてのみおらむとそ思

うたかひ給ことのあれは

五五（62）松風はかはらぬいろしたかけれは　（一〇オ）」
浪こすことをまたきかぬかな

五六（63）わたつみのあわにたとふる物ならは
いたつらにてそきえぬへらなる

女御

五七（64）きみたにもときはの色のかはらすは
松のちとせをたれとかはへむ
返し
五八（65）ちとせをはあかすそあるへきよろつよの
えたをたねにそなさむとそ思　（一〇ウ）」
おはいたるをかへしたまへれは
五九（66）くやしくもかへりにけるか唐衣
かひたゆきまてかへすかひなく
又
六〇（67）やとにこそなておほしけめをみなへし
なと秋ならぬつゆにぬるらむ
六一（68）いろ〳〵に花の心はうつるとも
をふ〳〵われはおらむとそ思
又　（一一オ）」
六二（69）あたにこそつゆはをくらめ花すゝき
わかむすひてし事はおとらし
六三（70）唐衣かくる人なきたきもの、
このしたひとりもえやわたらむ
六四（71）かきりなき思ひしあれはから衣
ぬるゝほとなくかはきこそせめ

六五（72）すり衣ぬきての、ちもゆふつく夜
おほつかなくはおもはさら南
又女に　（一一ウ）」
六六（73）おもへともおほつかなしや、みの夜の
てはかりにてはいか、しるへき
返し
六七（74）てはかりはこひもやすらむよめにても
しるきは人の心とそ見し
中務のきみちかきほとにす
みてきこゆる
六八（×）見わたしに春のとなりはありなから
かくゆきかてになるそわひしき　（一二オ）」
おと、かへりたまへるに中務
六九（76）こひわたるきみを見しにはあらねはや
おもひやまれてけふもかなしき
返し
七〇（77）あひ見てもしひても、の、かなしくは
なくさめかたくなりぬへきかな
おなし人に
七一（78）新よひ〳〵にきみをあはれと思つ、

人にはいはてねをのみそなく
返し　（一二ウ）」
七二（79）新きみたにも思いてけるよひ〳〵を
まつはいかなる心地かはする
おなし中務に
七三（80）わか身をも我にまかせぬ我なれは
つらきかこともなるにさりける
返し
七四（81）心にも身をまかせすときくからに
たのむ方なくおもほゆるかな
女をうらみて元輔　（一三オ）」
七五（85）うきなからさすかに物のかなしきは
いまはと物を思なりけり
返し女にかはりておと、
七六（86）おもはむとたのめし事もあるものを
なき名をたて、た、にわすれよ
延喜御時飛香舎にてふち
のえんありしに
七七（1）拾うすくこくみたれてさける藤の花
ひとしき色はあらしとそ思　（一三ウ）」

天暦御時前栽のえせさせ
たまけるに
七八（2）拾よろつ世にかはらぬ花の色なれは
いつれの秋かきみか見さらむ
むらかみの御時に御あそひ
あるにめしなかりけれは内侍
のかみの御もとにつかはしける
七九（3）春ならはよふことりをもき、てまし
つらきは秋のをはりなりけり　（一四オ）」
おと、いか、きこえ給へりけむ
女御
八〇（23）かく許おふるわかなの
つむはおしきに
おと、
八一（24）おしとてもた、にや、まむかすかの、
わかなつみにはゆくとこそきけ
返し
八二（25）なにせむにたえすもゆらむかすかのに
つまはわかなのたねはたえなて　（一四ウ）」
八三（26）よろつ世もつきしと思をかすかのに

わかなのたねは猶も、えなむ
返し
八四（27）かたみにもつむ人あらはかすかの、
わかなのくさはまかせてを見む
二月廿八日櫻花御覧して
ふみつくらせ給ひうたよま
せ給けるに
八五（82）またちらぬ花も見ゆめるはるかせを
ふきもやま南のちも見るへく（一五オ）」
八月廿八日さかの、花御覧して
八六（83）拾くちなしの色をそたのむをみなへし
花にめてつと人にかたるな
かへり給とて
八七（84）かへりなはうらみもそする女郎花
こよひはのへにいさとまりなむ
新命婦にもみちつかはすとて
八八（87）この葉さへふりにふるめるふるさとに
いかてのこれるもみちなるらむ（一五ウ）」
又おなし人に
八九（88）花もはもいろあさきなはふりにけり
心のふかく見えしかひなく
返し
九〇（89）花の色のうすきはつらし年ふれと
ふかき心をたれかそめけむ
又つかはしける
九一（90）ふるさとはわすれやすらむさくら花
いと、あたなる心とおもへは
小一条左大臣まかりかくれてのち（一六オ）」
かの家にかひ侍けるつるのな
き侍けるをき、て
九二（91）拾をくれゐてなくなるよりはあしたつの
なとかよはひをゆつらさりけむ
内侍馬か家にさねすけ
わらはにて侍ける時にゆみ
いにまかりたりけれはものか、
ぬさうしをかけものにして
侍けるを見侍て（一六ウ）」
九三（92）拾いつしかとあけて見たれははまちとり
あとある事にあともなきかな
むすめにまかりをくれて

又のとし家の花を見ていさゝ
かに心をのふといふ題を

九四（94）拾さくら花のとけかりけりなき人を
こふるなみたそまつはおちける

天徳三年九月廿三日鎮守府
将軍仲舒朝臣賜小禄及馬　（一七オ）」
種々物裹入韓之餌袋之
紙手書和哥一首

九五（95）雲に入つはさはのへにおほくとも
心うつりて我をわするな

三条右大臣うせ給てのち御
むすめ十人おはしけるか
はゝうへの御賀し給けるに
かさしまいり給へき人はたれ
にかとおほしけるを小野宮　（一七ウ）」
おほいまうちきみに女御殿
御せうそこきこえ給てそかさ
しまいらせ給けるむすめたちの
御さうそくさま〳〵にしき
をり物もからきぬみなきたま
へりはいせんは女御殿し給
けりとりつきなとはつき〳〵の
御むすめたちなとそし給ける
このかさしたてまつり給ける　（一八オ）」
ついてによみかけ給ける于時右衛門督

九六（96）ちりにける花の今までにほひせは
けふのかさしをまつそおらまし
おとこ女の許にふみやりたる
返ことせさりけれはかはりて

九七（97）ゆふけとふみちのそらなる人たにも
ことのいらへはしつる物也
女のもとにをくる　（一八ウ）」

九八（98）きみを猶うらみつる哉あまのかる
もにすむゝしの名をわすれつゝ
康保二年正月忠君来小野宮
是貞信公愛孫也仍以大徳
勧盃酒次有此詞

九九（99）あたらしき年の始とおもへとも
とまらぬ物はなみたなりけり
同年二月十六日者菅伯等　（一九オ）」

（おぐら　よしお／和泉市久保惣記念美術館学芸員）

悲戀兼盛元輔能宣等

一〇〇（100）　見ることにたもとそぬる、さくら花
そらよりほかのつゆやをくらむ
少将敦敏うせてのちひむ
かしくによりむまをたて
まつりたるに

一〇一（101）　またしらぬ人もありける　（一九ウ）」
撰あつまちに我もゆきてそ
すむへかりける　（二〇オ）」
以京極黄門自筆本行其外
一字無相違書寫了正本
依今川修理大夫氏親所望
遣者也
于時永正八年四月廿九日
左近権中将藤原為和（花押）　（二〇ウ）」
永正十三年五月廿日
重而校合了
右衛門督藤為和
（花押）　（二一オ）」